地方創生

最近の都市部・地方間の人口移動

主任研究員 木下 茂

○進む「地方創生」への取り組み

現政権が主要テーマとして掲げる「地方創生」を巡っては、「まち・ひと・しごと創生合戦略2015 改訂版」が昨年末に閣議決定され、各自治体も地方版の「人口ビジョン」「総合戦略」を策定してきているところである。この間、人口減少に対して危機感を強める自治体は様々の人材誘致策を打ち出している一方、人々の間でも「地方移住」への関心が高まりつつあるようにも見受けられる。こうした動きを踏まえて本稿では、15年の「住民基本台帳人口移動報告」（総務省、本年1月29日発表）などのデータを元に、最近の実際の人口移動の動きを確認してみることとした。

○昨年も続いた東京圏への人口集中

まず、15年における都道府県別の転入・転出者数をみると（第1表）、東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県を中心にした都市部への大規模な流入の動きに大きな変化はないようである。特に、東京都、千葉県、神奈川県への転入者は14年と比べて増加している。こうした東京圏への人口集中的動きは07年をピークにいったん弱まっていたが、12年をボトムとして再び強まってきているところである（第1図）。

○「地方移住」の動きは読み取れるか

一方で、いわゆる「地方移住」の動きはこうした統計データから読み取れるのだろうか。ここでは、都市・地方間の人口移動につき、（第1表）都道府県別転入・転出超過数

<table>
<thead>
<tr>
<th>都道府県</th>
<th>2014年転入数</th>
<th>2015年転入数</th>
<th>変化（人）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>-8,942</td>
<td>-8,862</td>
<td>80</td>
</tr>
<tr>
<td>青森県</td>
<td>-6,460</td>
<td>-6,560</td>
<td>-100</td>
</tr>
<tr>
<td>釧路市</td>
<td>-3,200</td>
<td>-4,122</td>
<td>-922</td>
</tr>
<tr>
<td>宮城県</td>
<td>2,437</td>
<td>-76</td>
<td>-2,513</td>
</tr>
<tr>
<td>秋田県</td>
<td>-4,232</td>
<td>-4,942</td>
<td>-69</td>
</tr>
<tr>
<td>山形県</td>
<td>-3,573</td>
<td>-4,143</td>
<td>-570</td>
</tr>
<tr>
<td>福島県</td>
<td>-2,211</td>
<td>-2,395</td>
<td>-184</td>
</tr>
<tr>
<td>茨城県</td>
<td>4,849</td>
<td>-4,826</td>
<td>33</td>
</tr>
<tr>
<td>栃木県</td>
<td>-1,795</td>
<td>-2,924</td>
<td>-1,129</td>
</tr>
<tr>
<td>栃木市</td>
<td>-2,255</td>
<td>-2,145</td>
<td>110</td>
</tr>
<tr>
<td>埼玉県</td>
<td>14,909</td>
<td>13,528</td>
<td>-1,381</td>
</tr>
<tr>
<td>千葉県</td>
<td>8,364</td>
<td>10,605</td>
<td>2,241</td>
</tr>
<tr>
<td>東京都</td>
<td>73,280</td>
<td>81,696</td>
<td>8,416</td>
</tr>
<tr>
<td>神奈川県</td>
<td>12,855</td>
<td>13,528</td>
<td>673</td>
</tr>
<tr>
<td>新潟県</td>
<td>5,518</td>
<td>-6,735</td>
<td>-1,217</td>
</tr>
<tr>
<td>長野県</td>
<td>2,437</td>
<td>-76</td>
<td>-2,513</td>
</tr>
<tr>
<td>福井県</td>
<td>-2,246</td>
<td>-2,154</td>
<td>92</td>
</tr>
<tr>
<td>山梨県</td>
<td>-586</td>
<td>-287</td>
<td>299</td>
</tr>
<tr>
<td>福島県</td>
<td>-2,255</td>
<td>-2,553</td>
<td>-11</td>
</tr>
<tr>
<td>岐阜県</td>
<td>-3,279</td>
<td>-2,934</td>
<td>345</td>
</tr>
<tr>
<td>岐阜県</td>
<td>-4,151</td>
<td>-5,194</td>
<td>-1,040</td>
</tr>
<tr>
<td>静岡県</td>
<td>-7,240</td>
<td>-6,206</td>
<td>1,034</td>
</tr>
<tr>
<td>愛知県</td>
<td>6,190</td>
<td>8,322</td>
<td>2,132</td>
</tr>
<tr>
<td>三重県</td>
<td>-2,939</td>
<td>-4,218</td>
<td>-1,279</td>
</tr>
<tr>
<td>滋賀県</td>
<td>-789</td>
<td>-1,987</td>
<td>-1,298</td>
</tr>
<tr>
<td>京都府</td>
<td>-1,174</td>
<td>-279</td>
<td>895</td>
</tr>
<tr>
<td>大阪府</td>
<td>-399</td>
<td>2,967</td>
<td>3,366</td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫県</td>
<td>-792</td>
<td>-7,409</td>
<td>-6,617</td>
</tr>
<tr>
<td>奈良県</td>
<td>-3,065</td>
<td>-3,962</td>
<td>-897</td>
</tr>
<tr>
<td>和歌山県</td>
<td>2,957</td>
<td>-3,980</td>
<td>-1,023</td>
</tr>
<tr>
<td>鳥取県</td>
<td>-1,131</td>
<td>-1,503</td>
<td>-372</td>
</tr>
<tr>
<td>島根県</td>
<td>-601</td>
<td>-1,366</td>
<td>765</td>
</tr>
<tr>
<td>岡山県</td>
<td>-392</td>
<td>-1,250</td>
<td>-858</td>
</tr>
<tr>
<td>広島県</td>
<td>2,938</td>
<td>-2,856</td>
<td>142</td>
</tr>
<tr>
<td>山口県</td>
<td>-3,647</td>
<td>-4,630</td>
<td>-983</td>
</tr>
<tr>
<td>徳島県</td>
<td>-1,495</td>
<td>-2,234</td>
<td>-739</td>
</tr>
<tr>
<td>香川県</td>
<td>-1,149</td>
<td>-492</td>
<td>657</td>
</tr>
<tr>
<td>愛媛県</td>
<td>-3,512</td>
<td>-3,869</td>
<td>-357</td>
</tr>
<tr>
<td>高知県</td>
<td>-2,269</td>
<td>-2,671</td>
<td>-402</td>
</tr>
<tr>
<td>福岡県</td>
<td>5853</td>
<td>-5,848</td>
<td>505</td>
</tr>
<tr>
<td>熊本県</td>
<td>2,961</td>
<td>-3,333</td>
<td>-372</td>
</tr>
<tr>
<td>大分県</td>
<td>-2,548</td>
<td>-2,419</td>
<td>129</td>
</tr>
<tr>
<td>宮崎県</td>
<td>-3,325</td>
<td>-3,462</td>
<td>-137</td>
</tr>
<tr>
<td>鹿児島県</td>
<td>-4,559</td>
<td>-5,298</td>
<td>-739</td>
</tr>
<tr>
<td>沖縄県</td>
<td>-371</td>
<td>16</td>
<td>33</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注1）マイナスは転出超過を示す。（注2）総務省「住民基本台帳人口移動報告」のデータより作成

地方創生
「東京圏とそれ以外の地域」という区分でまとめた第2表をみると、すべての道府県が14・15年と2年連続で東京圏に対して転出超過になっていることがわかる（15年については、一部の県で転出超過数が減少しているが、全体としてその幅は大きいとはいえない）。

次に、市町村レベルの動きを確認するため、転入超過となっている市町村数を都道府県ごとにまとめた第3表をみてみよう。転入超過の市町村数が前年に比べて増加した県の数（東京圏、名古屋圏、大阪圏を除く）は14年の13の後、15年も15にとどまっており、全国的な広がりをみせているとは言い難い。以上のように、現状では「地方移住」の動きをマクロ的な人口移動データから確認するのは困りものである。

そこで、やや視点を変えて、転入超過となっている市町村にはどのような年齢層の人々が移動してきているのかを確認してみよう。

第4表には、3大都市圏以外の市町村のうち、2015年の転入超過率（転入超過数／人口）が上位・下位50の市町村について年齢階層別の転入超過率の平均値をまとめている。これをみると、上位50市町村では、下位50市町村に比べて20歳代後半から30歳代後半、及び10歳未満の年齢層の転入超過率が高いことがわかる。このことは、若年層の夫婦が子どもと一緒に転入してきているケースが多いことを示唆するとともに、住民誘致にあたっては、こうした層の取り込みが重要であることを示唆しているようと思われる。

(第2表) 東京圏への道府県別転出超過数の推移

(第4表) 3大都市圏以外の道府県における年齢階層別の転入超過率

(注) 総務省「住民基本台帳人口移動報告」のデータより作成

(第1図) 3大都市圏の転入・転出超過数の推移

(注1) マイナスは転出超過を示す

(注2) 東京圏: 東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、名古屋圏: 愛知県、岐阜県、三重県、大阪圏: 大阪府、兵庫県、京都府、奈良県

(注3) 総務省「住民基本台帳人口移動報告」のデータより作成
地方創生

（第3表）都道府県別にみた転入超過の市町村数

<table>
<thead>
<tr>
<th>都道府県</th>
<th>2013年</th>
<th>2014年</th>
<th>2015年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>23</td>
<td>12</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>沖縄県</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>51</td>
<td>4</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>金沢市</td>
<td>12</td>
<td>14</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>長崎市</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>9</td>
<td>9</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>9</td>
<td>15</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>沖縄県</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>51</td>
<td>10</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>11</td>
<td>19</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>沖縄県</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>51</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>11</td>
<td>20</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>沖縄県</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>51</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>7</td>
<td>20</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>沖縄県</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>51</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>7</td>
<td>20</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>沖縄県</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>51</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>7</td>
<td>20</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>沖縄県</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>51</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（第4表）転入超過市町村における年齢階層別転入超過率（%）

<table>
<thead>
<tr>
<th>世代</th>
<th>0~4歳</th>
<th>5~9歳</th>
<th>10~14歳</th>
<th>15~19歳</th>
<th>20~24歳</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>0~4歳</td>
<td>6.14</td>
<td>4.38</td>
<td>1.99</td>
<td>-0.72</td>
<td>1.77</td>
</tr>
<tr>
<td>5~9歳</td>
<td>25~29歳</td>
<td>30~34歳</td>
<td>35~39歳</td>
<td>40~44歳</td>
<td>45~49歳</td>
</tr>
<tr>
<td>1.30</td>
<td>0.08</td>
<td>0.65</td>
<td>0.27</td>
<td>0.60</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>75~79歳</td>
<td>80~84歳</td>
<td>85~89歳</td>
<td>90歳以上</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>0.27</td>
<td>0.55</td>
<td>0.72</td>
<td>0.76</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注1）2015年の転入超過率上位・下位50市町村の平均値
（注2）転入超過率=転入超過数/人口
（注3）3大都市圏以外の県・市町村について集計
（注4）総務省のデータより作成

〇「人口移動不均衡」の解消は容易ではない

以上、少なくとも足元では都市部への人口集中の動きが続いていることをみてきたが、このことは、政府が「総合戦略」で掲げている4つの「基本目標」のうちの1つ、「地方への新しいひろい流れをつくる」（注）が容易でないことを示しているように思われる。都市部・地方間の人口移動の背景には、経済的な要因が強く作用していると思われるからである。

実際、都市部・地方間の人口移動の動きを、マクロ経済指標の推移と重ね合わせてみると、両者には連動関係があるように見受けられる（第2〜4図）。こうした関係を前提に、

（注）転入超過の市町村数が14〜15年で前年対比で増加した県（東京都、名古屋市、大阪市を除く）、転入超過率が20%以上の市町村に該当
（注2）総務省「住民基本台帳人口移動報告」のデータより作成。

（注）具体的には、現地調査から東京都等〜10万人規模の人口流出が生じているのに対し、2020年までに、東京都等から地方への転出を4万人増加させること、地方から東京都への転入を6万人減らすことにより、均衡させることが目指すものである。また、この目標の実現のための具体的な政策パッケージの一環として、「地方移住の推進」が掲げられている。
最近の都市部・地方間の人口移動

（第2図）3大都市圏への転入者数と有効求人倍率格差の推移

（第3図）3大都市圏への転入者数と実質県内総産成長率格差の推移

（第4図）3大都市圏への転入者数の推計

例えば10万人規模の人口移動不均衡を解消しようとした場合、相当程度地方の経済環境が都市部に対し相対的に有利化する必要がある（直近で人口移動が均衡していた96年当時、有効求人倍率と実質県内総生産の都市部・地方間格差はそれぞれ-0.2％ポイント、-0.9％ポイントであった）。

こうした状況を踏まえると、それぞれの地域の魅力を具体的に発信していくような地方ごとの独自の取り組みに加え、地域経済・産業全体の活性化につながる新たな政策誘導の工夫も必要であるように思われる。